

鴨川右岸の銷金窩

——《上木屋町》の文学景觀素描——

加藤 政 洋

1 御池大橋のたもとから

(一) 漱石の句碑

京都市役所前の御池通を東へと進み、鴨川にかかる橋のたもとにさしかかると（西詰南側）、小さな石碑と高札型の銘板が目に入る（図1）。高規格の道路の交通量は比較的多く、路側帯には大型の観光バスも停車することがあり、植栽のあいだに小ぢんまりとたつ石碑と銘板の存在を、それと気づかず過ぎてしまうこともあるだろう。



図1 漱石の句碑と銘板（筆者撮影）

石には、こう刻まれている。

木屋町に宿をとりて川向の御多佳さんに

春の川を 隔て、 男女哉 漱石

これは夏目漱石の句碑なのであった。銘板の説明書きによると、大正四（一九一五）年三月、漱石は四度目の滞洛に際して、画家の津田青楓（つだ・せいふう 1880-1978）のすすめで、「木屋町御池の旅館きたのだいか」に宿泊した。

このとき、祇園花街のお茶屋「大友」の女将である磯田多佳と交友をもったことは有名な話である。^① 詳細は省くが、これは約束を反故にした多佳に対して怒り心頭の漱石が送った句で、祇園花街と「木屋町」のみならず、男と女のなかを隔てる物理的／象徴的な地景として鴨川が詠まれている。

木屋町通をあるくと、建物の前に幕末維新期の人物たちまつわる石碑が目にはいる。この漱石の句碑が橋畔に設置されているということ、それは「北大嘉」の建物（あるいはその敷地）が存在しないことを直截的に物語る。

(二)「一見さんお断り」の旅館〈席貸〉

津田青楓によると、漱石をもてなすには「普通の宿屋ではさわがしいし、殺風景でもしろくない」ということから、自身の母を介して木屋町の宿（北大嘉）を選んだ。この宿で漱石と初対面した磯田多佳は、「夏目さん、えらい粋^①なとこへおこしやしたなあ」と感嘆した。元芸妓でお茶屋を経営する彼女をして、このように独特のニュアンスをふくんだ褒め言葉が口をついてでたということ自体が、「木屋町の宿」の特殊な性格を示している。

東京からやってきた漱石、そして宿を斡旋した津田の口からはついで出ることがなかったものの、花柳界に生きる多佳が「粋」などと呼んだ「宿」とは、じつのところ京都固有の「一見さんお断り」の旅館、すなわち席貸なのであった。

津田のいう「普通の宿屋」（＝旅館）とは区別される席貸のありようを、臼井喜之介（うすい・きのすけ 1913-1974）は次のように説明する。

……他国の人によく聞かれることだが、旅館と席貸はどう違うのか、ということである。法律的には両方とも旅館としての認可があるのだが、席貸の方が多少風俗営業的な甘さが認められて居り、芸者や新妍芸者（やとな）が入って酒宴を催してもいいという事になっていて。その代り、京都で貸席^{マッ}というところ、下河原、安井、木屋町のこの三つの区域に限られていた。^③

席貸とは、芸妓や新妍芸妓（雇仲居）を気軽に聘んで宴会やお座敷あそびをすることができる、特殊な旅館である。^④花街のお茶屋とも異なるのは、あくまで宿泊を前提していることなのだが、どちらも「一

見さんお断り」であるところに共通点がある。

そしてもうひとつ、多佳の発した「えらい粋なとこへ」の「とこ」には、場所性も含まれているだろう。

(三) 席貸街としての《上木屋町》

全国の花街事情に通じた旅行ライター松川二郎は、稀代のガイドブック『全国花街めぐり』（一九二九年）のなかで、漱石の宿となった北大嘉の位置する「木屋町」を、次のように説明した。

三条小橋の東の袂を北へ折れてはいると、西側は高瀬川がゆるやかに流れて、東側の町並は家の三五軒おき位に路次があつて、路次の突当りが皆席貸になつてゐる。座敷は大抵鴨川の水に臨んで、河原から東山一帯を見晴らすおもむきは先斗町に同じであるが、僅かのちがひで先斗町ほどざわつかず伸びりしてゐる点が生命である。そこが即ち木屋町。^⑤

清冽な鴨川に面し、東山を望む山紫水明の木屋町に立地する席貸の特色を、松川は以下のようにまとめてみせる。

是等の家々は表に旅館と書いてあつても、旅館にあらず、料亭にもあらず将た貸席^{おぢや}でもないところの「席貸」といふ独特のお茶屋である：〔略〕…藝妓置屋とは直接の取引がなく、凡て貸席から送り込む形式にはなつてゐるが、木屋町の如きは地続きで極く近い関係もあらうが、貸席と席貸の連絡がよく取れてゐて、殆ど普通の貸席と異なるところは無いやうである。^⑥

表通りの看板に「旅館」と書かれていたとしても、旅館ではなく、ましてや料亭などでもなく、花街のお茶屋とも異なる独特のレンタル・スペース業、それが「席貸」なのであった。しかも、芸妓の出入りに関しては、直接お座敷をかけることはできないにしても、お茶屋との連絡がよく取れているため花街とさして変わりはないのだという。

松川の記述を四半世紀ほどさかのぼり、第五回内国勸業博覧会の大坂開催にあわせて出版された『夜の京阪』というガイドブックを参照してみたい⁷⁾。そのなかで、劇作家の大森痴雪（おおもり・ちせつ 1871-1936）は「木屋町」を以下のように描写している。

一体この木屋町といふのは……稀に旅館席貸し等があつても、僅かに病人の出養生、さては俳諧の運座謡曲講などに使用されるぐらゐのもので、あつたが、何時の頃からか、表面を旅館と名告つて而して通称を席貸しと呼ぶ、所謂準青楼の爲めに占領されて了つて、一町殆んど総てが路次構への、其の門口には何屋何楼何館など、いふ軒燈が掲げられ、卑しい娯楽に現なき輩が日夜を分かず出入する⁸⁾。

いつごろからかはさだかでないものの、表向きには「旅館」と名のりつつ、実際には「青楼」（＝遊廓の妓楼）まがいの営業をする旅館——通称「席貸」——が、ここ「木屋町」に集積していた。

「京都の旅宿」を案内する鈴木露村（不詳）もまた、大森痴雪と同様、いくぶん批判的なまなざしを向けつつ、次のように描写する。

上木屋町といふは……〔略〕……三条から二条迄の間ズラリと青柳の

影に軒燈が竝んでゐるが不思議なは玄鶴楼を除くの外は一軒として通りからの構へでなく、細長い路次を這入て行くと玄関が控へて居るといふ見るから合点の出来るハ、淫魔窟だ、多くは席貸兼旅人宿で吉富楼、玉川楼、大可楼、花外楼、大津家等が有名で玄鶴楼は料理兼業だが、総じて白昼はそれはく火の消えた様だが例の軒燈に灯が艶めく頃になると祇園や先斗町から解語の花が夜店ぢやないが出没し又は高等地獄とやらが魔術を行ひに来る⁹⁾。

ここまで明確には記してこなかったけれども、漱石の泊まった席貸の位置する一帯、すなわち木屋町通と鴨川とはさまれた二条―三条間の街区は明治期以降《上木屋町》と通称されてきた。しかも《上木屋町》については「爰計り治外法権といふ体で、何をしても一向差支なしといふ頗る不思議の土地」であるとされ、文中にあるとおり、当時は《祇園》や《先斗町》の芸妓ばかりでなく、「高等地獄」（高級な娼婦の俗称）までもが出入りする場所であつたという。

鈴木露村はすばり指摘する——「京都の消金窩では第一等だ、されば祇園町の遊びより木屋町遊びといふのがズウト高額の所ろで若輩なもの、行き難い所ろである¹⁰⁾」、と。祇園花街よりも上等な遊所、それが《上木屋町》である。

明治後期（二〇世紀初頭）の京都にあつて、高瀬川の最上流部と鴨川とはさまれた、木屋町通に面する片側町の《上木屋町》は、すでに席貸街となつていた。ただし、これら案内者——ある種の都市観察者——たちが慎重に素描するように、街区全体ではなく、細い路地の奥に位置する建物だけが席貸であつた。この点は、「京都市明細図」（総合資料館版）などからも、少なからず読み取ることができる¹¹⁾。

より詳細にみてみよう。

：「略」：此側は皆一定の建築で二階附の家屋で必ずそれが東面は鴨川に臨んで居ります、此樓の間口は大抵五間或は三間くらいになつて居りますが、此木屋町のは表側は普通の種々の雑業をして居る者が住で居ります、其傍らに路地と称して小路があります、是が白河石が敷つめてあるがタ、キになつて居つて天明建築の儘ですから狭くて車を引入る事は出来ぬのです、それで路地の突当りが玄関になつて居ります：「略」：⑩

このように、『上木屋町』の席貸は二階建てのほぼ同じ建築様式で、東側はいずれも鴨川に面している。西側の表通りには商店や種々の生業をする者たちが住んでおり、奥まった場所に位置する席貸へ登楼するためには、そのかたわらにある白川石を敷きつめた「路地」を抜けてゆかなければならない。

京都固有の宿「席貸」、そして席貸街ともいうべき『上木屋町』には、その名を知られる俳優や文人たちがさまざまに足跡を残している。

2 昭和三五年度の池波正太郎

(一) 祇園祭

京都の祇園祭は何度も見物したが、七月一日の、祭はじめの「吉符入り」から十七日の山鉾巡行までの約半月を京に滞在し、おもうさまに祭気分を味わったのは昭和三十五年の夏のみである。^⑪

昭和三五（一九六〇）年九月、松本幸四郎（八代目 1910-1982）の主

演した松竹映画『敵は本能寺にあり』が公開された。脚本を担当したのは、三十代後半の池波正太郎（いけなみ・しょうたろう 1923-1990）である。当時、新国劇の劇作家として活躍しながら小説を発表していた池波にとつて、映画の脚本は初めてであり、そしてこれが最後になつたという。

監督した大曾根辰夫をはじめとするスタッフらとの打ち合わせのために、はからずも京都に滞在するところとなつた彼は、祇園祭に華やぐ京都を存分に堪能したのだつた（図2・表1）。

入浴したのは、「吉符入りの当日」、すなわち七月一日である。八坂



図2 市役所前の長刀鉾（1960年7月17日 筆者所蔵）

「神輿洗」とは、鴨川畔で水をすくい上げて、文字通り神輿を祓う神事である。「お迎え提灯」は、これまた文字通りに神輿を迎える提灯行列を指す。昭和二七（一九五二）年に八十年以上の歳月を経て復活した「お迎え提灯」は、必ずしも池波の幻想するような「古式」にのっとって行なわれたわけではないはずなのだが、情趣ばかりでなく彼自身の「気分」の高ぶりも伝わってくる。

二日の〔くじ取り〕は、山鉾巡行の順序を決める行事で、さらに十日の〔神輿洗い〕や〔お迎え提灯〕などの行事が古式にのっとって日数をかけ、丹念につづくうち、いやが上にも祭の気分、情趣が高潮して行くのである。¹⁴⁾

神社に足を運んだ池波は、長刀鉾町の稚児が「羽織・袴の礼装で、ふたりの禿をしたがえ、祭の役員たちにつきそわれて社殿を千回まわる行事を見物した」。

表1 祇園祭のおもな行事

1日	吉符入り（～18日） 長刀鉾町稚児社参（お千度参り）
2日	くじ取り式
8日	鉾建て
10日	お迎え提灯 神輿洗 ねりもの
11日	長刀鉾町稚児社参（「お位」もらい）
13日	山建て
16日	宵山
17日	山鉾巡行 神幸祭
18日	山建て
23日	宵山
24日	山鉾巡行 還幸祭
28日	神輿洗

京都市文化観光局文化課『祇園祭—戦後のあゆみ』より筆者作成。

仕事のかたわら、時間をつくっては一連の行事を見物していたのだろう。一日には長刀鉾町の稚児が八坂神社に参じる「お位」もらいを見物し、一六日の宵山を迎える。京都にはいつてから二週間がたち、シナリオもほぼ完成していたようだ。「山鉾巡行が祇園祭のクライマックスなら、その前夜の宵山はハイライトであろう」という池波にとつて、翌日の巡行よりも心惹かれるのは、「なんといつても〔宵山の夜〕」なのであった。¹⁵⁾

後知恵をもつてするならば、池波の滞在した昭和三五年は、祇園祭史上の大きな転機にあつたといえるかもしれない。というのも、四条通から寺町通を北上して御池通へと出ていたコース設定が、翌年には河原町通へ変更されたからである。

さらに、彼自身はふれていないけれども、一〇日には《祇園新地甲部》に隣接する小規模花街の《祇園東》新地組合が主催して、「ねりもの」がとりおこなわれた（図3）。「ねりもの」とは、八坂神社の氏子でもある祇園花街の芸妓が仮装して練り歩く、祇園祭独特の風習で



図3 「ねりもの」の行列
(1960年7月11日 筆者所蔵)



図4 四條烏丸の黒主山（1960年7月24日 筆者所蔵）

ある。一八世紀中葉から営まれてきた「ねりもの」は、元来、鴨川を越えて西側の市街地へわたることはなかったものの、戦後は市役所前に出て舞が披露されるなど、スベクタクル性を高める演出が施されていた。この年を最後に「ねりもの」が開催されていない現状もあわせて考えるならば、やはり昭和三五年をひとつの転換点としてとらえることができるのではあるまいか。

偶然にも、浅草出身で在野の花街研究者である加藤藤吉が行列の光景をカメラに収めており、歴史上最後となった「ねりもの」をしのぶよすがとなる。

池波が見物していたならば、どのような感想を残しただろうか。

祇園祭が終って帰京しようとした私をおどろかせたのは、おもいもかけぬ直木賞の受賞であった。¹⁶

同年七月一九日午後、軽井沢で開かれた直木賞の選考委員会において、ノミネート五回目にして池波正太郎の受賞が決まった。受賞作は「錯乱」。宿に連絡が入ったのは当日の夜であろうか。

一六日の「宵山の夜」こそが祇園祭だという彼のあたまのなかに、おそらく後祭ははいつていまい。まだつづいていた祇園祭をみることなく、あわただしく帰京したはずだ。一七日と同様、日曜日にかさなった二四日の後祭の巡行は晴天にめぐまれ、人出も多かった（図4）。

（二）《上木屋町》の宿

京都の泊りは、嵐寛寿郎氏の先夫人がやっていた三条木屋町上ルところの「橘」という小ぢんまりとした宿で、むろん当時は、寛寿郎氏も住んでいた。

鴨川へ突出した床で食事をしながら、いまは亡き大曾根辰夫監督と、ああでもないこうでもない、シナリオの手直しをしたものだ。¹⁷

昭和三〇年代前半、池波正太郎が京の定宿にしていたのは、三条木屋町上ルの「橘」であった。昭和三三（一九五八）年下期の直木賞候補となる『応仁の乱』の取材に際して、友人の脚本家・井出雅人（い

で・まさと(1920-1989)の紹介で泊まったのがきつかけであったという。アラカンこと嵐寛寿郎(あらし・かんじゅうろう 1902-1980)は、『敵は本能寺にあり』に徳川家康役で出演している。

池波は記していないけれども、「橋」は三条上ルというよりは、むしろ御池上ルの《上木屋町》に立地しており、ここもまた席貸であったにちがいない。実際、「橋」は朝飯だけは、寛寿郎氏が若いころからいっしょに暮しているというお婆さんがこしらえてくれ、あとは「たん熊」や「河しげ」の仕出しであった」と記されるように⁽¹⁸⁾、料理を仕出しに頼っていた。これも明治期以来の席貸の制度的慣習である。「たん熊」は河原町四条上ル(上紙屋町)に立地する、昭和四(一九二九)年創業の割烹の老舗である。⁽¹⁹⁾同じく「河しげ」も、河原町三条(大黒町)に位置する昭和一七年創業の割烹であった。⁽²⁰⁾

上記の引用文中に「鴨川へ突出した床で食事をしながら」とあり、池波は仕事のあいまに仕出しや出前された料理を、鴨川畔のみそぎ川に架け出した「床」で愉しんでいたようなのだが、近代的な納涼床の文化が発祥したのもまた、ここ《上木屋町》の席貸である。

昭和三一(一九五六)年の住宅地図をみると、御池通から四筋目の路地奥に「橋」の文字がみえる。⁽²¹⁾そこで、昭和三〇年代の住宅地図を参照して、「旅館」と表記された建物区画を中心に図化したのが図5である。旅館の多くは席貸に由来する宿泊施設、あるいは当時も席貸であったと考えてよい。

これらのうち、少なくとも観世楼・玉房・竹島・水清楼・浜崎の五軒は明治後期には営業していた。橋は戦後に開業したのであろう。木屋町通に面した入り口には、「翁クラブ」がある。これはTという女性の経営する「新妍芸妓」の置屋であり、当時の《上木屋町》は派遣型風俗営業とその派遣先となる席貸とが混在する戦後京都の(銷金

窩)であったことがわかる。出歩くことの好きな池波正太郎のことだから、新妍芸妓(雇仲居)の存在にはうすうす気づいていたにちがいない。

3 嵐寛寿郎と森光子の《上木屋町》

(一) アラカンはかく語りき

橋は嵐寛寿郎夫妻(当時)の経営する宿であった。じつのところ池波正太郎が語る以上に、アラカンと《上木屋町》との関係はふかい。

へえ、生い立ちから、話さなあきまへんか? 明治三十五年十月八日、京都で生まれた。木屋町の三条下ル、本名・高橋照一、満七十三歳ダ。先代の桐竹紋十郎が祖父に当ります。そもそも芸道の血筋を、ワテはひいている。

叔父が嵐徳三郎、叔母は祇園の芸妓で、三味線の名人といわれた、その娘がああ森光子です、つまりあれとワテは従兄妹の関係ダ。⁽²²⁾

昭和の映画スター嵐寛寿郎と森光子とが従兄妹であることはよく知られている。アラカン(本名・高橋照一)本人によれば、生まれは木屋町三条下ルであった。幼年期をふりかえって、彼は次のように語っていた。

木屋町はどの家でも、賀茂川の岸まで、ウナギの寝床のようなつくりでつしやる。夏になると、涼みの床がずらっと出て、川むこうのまん前が大文字の山ダ。八月十六日の夜は、あかあかと燃え

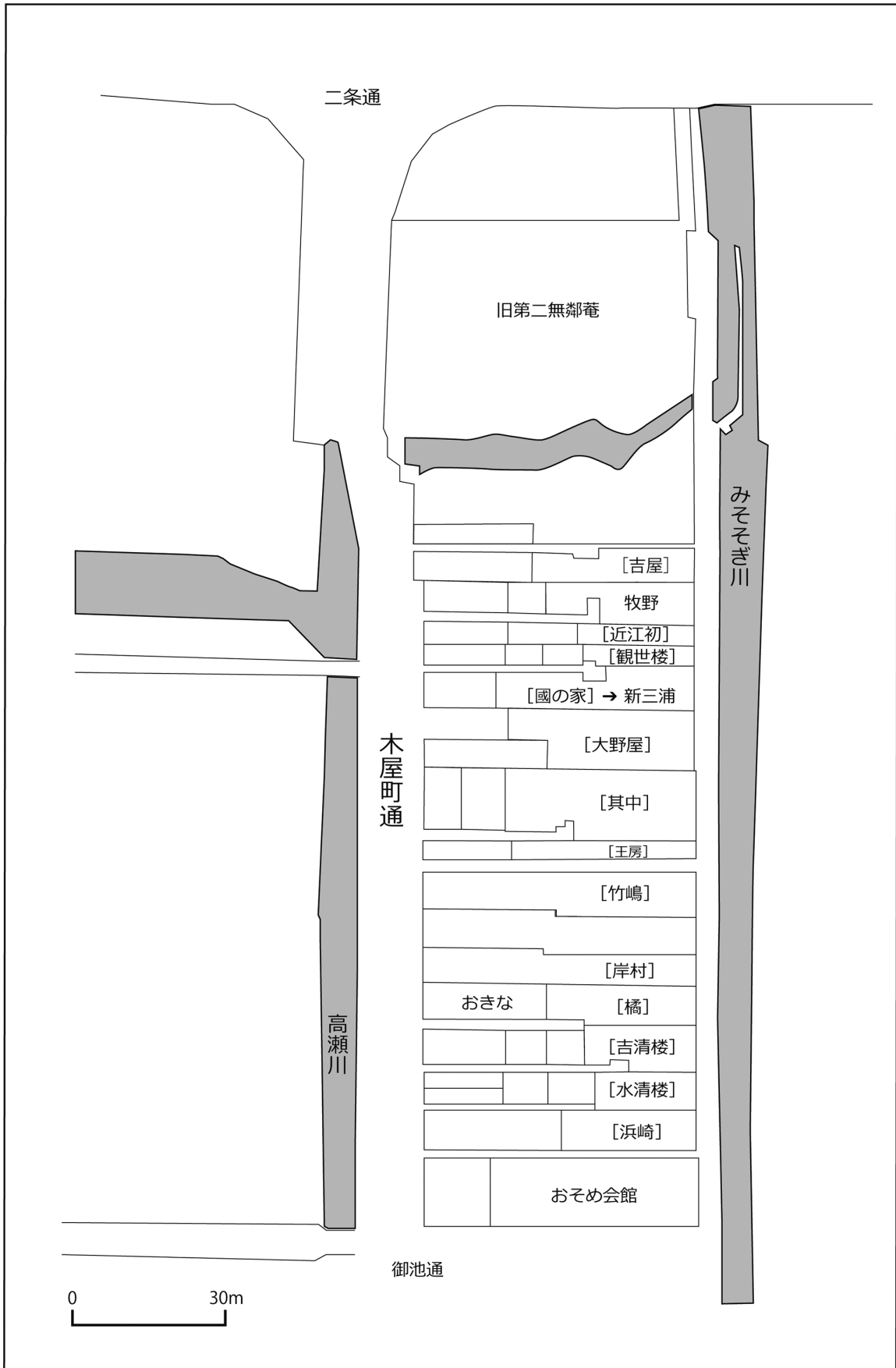


図5 昭和30年代後半の《上木屋町》

る火が、家のなかまで赤く染める。ワテの小さいころは、日の暮れがたになると、河原に芸人が出た。²³

鴨川に面して、夏には床を掛け出すという家宅……。京都の地理に明るい人ならすぐに気づくだろう。木屋町三条下ルの鴨川右岸は花街の《先斗町》なのであって、「ウナギの寝床のようなつくり」などあり得ないということに。この情景は木屋町三条下ルではなく、同じ右岸でも上流に位置する《上木屋町》のそれと混同しているようにおもわれる。

事実、池波の訪れた当時の愛妻と暮らす以前から、彼は《上木屋町》を知っていたはずなのだ。

親父は人がよいだけで、生活能力のない、もの事にルーズな性格の人やったから、とうとう母親に家を追ッ出されて、妹の家へ厄介になるという始末や。

へえ、森光子の母親ダ、これが大阪の浜寺の紡績会社のボンにひかされて、つい目と鼻の先の木屋町二条で旅館をはじめた。そこへ転がりこんだ。後の話やけど、女中に手をつけて子供を生ませてるんだ。²⁴

「木屋町二条で旅館をはじめ」ていた妹——森光子の母である村上艶——のところへ転がり込んだというアラカンの父・高橋栄之助。アラカンと森光子の語りには、いくらか齟齬がある。

たとえば森は「父は大阪の繊維会社の跡取り息子でした」というので、この点は一致している。だが、

京都帝大を出た父は一つ年上の、三味線が好きだからという理由だけで芸妓になった母と恋愛をした。父の実家は結婚を許さない。長男ができてやむなく家に迎えようとしたけれど、母のほうが「あんな窮屈な家は嫌」と断り、伯父と國の家を始めた。²⁵

というように、母（村上艶）と伯父（高橋栄之助）とでもにはじめた、あるいは「母の艶は三味線好きが高じて芸妓になり、お金をためて國の家を始めました」ともいうのだが、²⁶はたしてどうであろう。「ひかされて」——芸妓から落籍されて——店を持たせてもらったというアラカンの語りの方が、花街の慣わしからすると現実味があるようにおもわれる。

（二）森光子の記憶

「木屋町二条」の「國の家」を森は「割烹旅館」としている一方で、²⁷「森は20（大正9）年、京都・木屋町二条の席貸しの家に生まれた。

父は京大生、母は芸者。母が席貸しを営み、父は時折やつてきた」というインタヴュー記事も残る。²⁸「國の家」もまた席貸しだったのだ。

大正九年（一九二〇）生まれの森が、生年の「何年前から國の家があったのかはわかりません」というように、²⁹開業年はさだかでないものの、昭和三（一九二八）年のガイドブック『大京都』では「上木屋町の席貸」の一覧に、漱石の泊まった北大嘉や観世楼・玉房楼・水青楼とともに、「國の家」も名をつらねている。³⁰また昭和七年版『京都商工人名録』には、「國の家」の経営者として「村上ツヤ」が登載されている。

「國の家には全盛期の阪東妻三郎さんがよく遊びにきました」と森がなつかしむように、芸能界の関係者も出入りしていたらしい。だ

が、昭和八年の夏に「働きづめ」の艶は「結核を再発して」この世を去る³¹。その二か月後には「大阪のボン」(父)も後を追うように亡くなった。

「母がいなくなつて國の家は火が消えたようにさびしく」なる。「私はゆくゆくは國の家の女将を継いでいくものと周囲から期待されており、「女優になりたいなんて言い出さなかつたら私は祇園で舞妓になりいずれは母の跡を継いで女将になつていた」と森はいうものの、それは「嫌で嫌で仕方なかつたし」、「小学校を出たばかりの私に女将の代わりができるわけもな」いことを悟つた伯父(アラカンの父・栄之助)は、彼女の女優志望を認めざるを得なかつた。

しかしながら、興味ぶかい事実がひとつ残る。森光子の本名は村上美津である。昭和十五年版の『京都商工人名録』に「國の家」の経営者として、村上美津の名をみることができるとだ³²。伯父の栄之助は、まだ十代の美津を妹亡きあとの名義人としながら、経営そのものは自身が担っていたのだろう。アラカンは「後の話やけど、女中に手をつけて子供を生ませてるんだ」といい、森は「父代わりだつた伯父が國の家の仲居さんと一緒にになりました」というとおり、実質的な経営者は栄之助夫妻となつたようだ。

とにかく女性にもてたというアラカンが所帯をもつて《上木屋町》で橋を経営するにいたつた背景には、こうした地縁があつたのだろう。そこからではわからない、京都固有の旅館(席貸)のなんたるかを、彼は熟知していたはずだ。

おじは女性との別れ方がきれいだというので有名でした。最後は私もびつくりしましたが、國の家近くの三条寄りにあつた家をその方にあげてしまい、請求された金額の二倍をキャッシュで払つ

たといいます³⁴。

「嵐寛寿郎氏も前夫人と離婚し、若い現夫人と何処かへ行つてしまひ、私や井出君の常宿だつた〔橋〕も他人の手にうつり、われわれとは無縁のものとなつてしまつた」と池波正太郎は述懐する³⁵。

(三) 送り火の眺め——小島政二郎の体験

子供心にも情緒を感じたのは、五山の送り火でした。うちからは五つのうち四つまで見えました。八月十六日は夜の八時になると、街の灯がきえる。涼み床の雪洞も蠟燭を吹き消して、お客さんと待っています。五つの山にぽつと火がとまり、形がはっきりすると、黒塗りの薄い盆にお酒をつぎます。

その盆を胸の前に置き、東山の大火字をお酒に映します。そうして主賓の方から静かに飲みまわすのです。一年を元気で暮らせるといわれ、子供は大火字を映した水を飲んだものでした³⁶。

これは森光子の語りである。《上木屋町》からの眺望は、送り火をみるにもう一つつけであった。

作家の小島政二郎(こじま・まさじろう 1894-1994)は、戦後京都の映画界を牽引した東映京都撮影所のマキノ光雄に招かれて(光雄は「日本映画の父」と謳われる牧野省三の次男)、「大火字」の見物にでかけている。

マキノの自宅は「二条あたりの加茂川沿いの、ごく当り前の京都風二階家」であつた³⁷。二条というからには、鴨川右岸の《上木屋町》北部の可能性が高い。図5に示したとおり、マキノ邸は山県有朋の別邸

「第二無鄰菴」の南に位置していた。嵐寛寿郎といい、森光子といい、《上木屋町》は芸能とも縁の深い空間だったわけだ。

その晩、物干の上で、ホンの少し酒を流した黒のお盆に大文字の火を映しながら、珍しいお酒とうまいアユとを御馳走になった。

珍しいお酒と云うのは、その頃はまだオンザロックなんて飲み方がまだなかったのだろう、菊正宗をお燗して、それを冷蔵庫に入れて置いて、小さなグラスで飲ませてくれたそうだ。

飲ける久米正雄にはどうだったのだろうか。マキノ君も、余りいける方ではなかったのだろうか。私のように全然いけない人間には、こんなうまいお酒はなかった。

お酌してくれ、席を取り持つてくれるのは、綺麗な女優たちだから、その物干の上の御馳走は、私には一生一度の楽しい饗宴だった。

商家でないマキノ邸には、当然、床などなかったであろう。当時、《先斗町》のお茶屋などには、河畔の床などにくわえて、屋上に物干し台のようなものが設置されていた。お茶屋が納涼や送り火の見物に、常連客をあげることもあったらしい。小島も、マキノ邸のそうした物干し台に招かれていたのだ。

では、「珍しいお酒とうまいアユ」とは、いかなるものであったのだろうか。

小島自身もふれているが、北大路魯山人にしたがうならば、当時、「鮎のいいのは丹波の和知川が一番」であった³⁹。和知川は、若狭湾にそそぐ由良川水系上流部の河川である。このときに用意されたのは、

わざわざそこから調達された鮎であったといい、ひと口半大の寿にして供される。「こんなうまいアユ寿司を、飽きる程食べたことは、私の一生にこの時一度しかない」と、小島は回想する。

そして「珍しいお酒」である。それは、いちど燗をつけた菊正宗を冷蔵庫に入れて冷やしたもので、お猪口（盃）ではなく、小さなグラスについて呑んだという。酒のいける口ではない小島も、「こんなうまいお酒はなかった」と感嘆する。燗をつけたことでアルコール分がとび、それをキンキンに冷やしているのだから、すっきりとした味わいとなっていたにちがいない。

ところが、この飲み方は必ずしも「珍しい」というわけではなかったらしい。虚子編『新歳時記』に収録された七月の季語には「冷酒（ひやざけ）」があり、虚子は「一寸洒落た料亭などに行き、冷酒をと命ずると、心得て運んで来る。悪酔しない為に軽く暖めて冷したものといふ」と説明する⁴⁰。小島政二郎にとっては、はじめて知った味であったわけだ。

映画に出演する綺麗どころに囲まれて、大文字の火を見ながら、そして火を漆黒の器にそそいだ酒に映して呑む「一生一度の楽しい饗宴」。《上木屋町》の贅沢といえようか。

4 ふたたび御池大橋のたもとから

戦後すぐに森光子が「東京に見切りをつけ」て、「焼けなかった京都へ」もどつてみると、國の家はすでに売り払われていた⁴¹。昭和三年の住宅地図には、いまだ國の家の名がみえているので、購入者が経営を引き継いでいた可能性もある。

ところが、昭和三四年の住宅地図になると、國の家が消えて「新三

浦」と書き込まれている。橋のある路地のひとつ北側で木屋町通に面して営業していた「とりの水炊き」で知られる新三浦が、川附きのこの場所へと引越してきたのだった。

のちに國の家を買った方が「新三浦」という鶏の水炊きの店にしましたが、改築をなさいませんでした。うれしいことに町家の風情はそっくり昔のまま残っています。：「略」：

路地のいちばん奥の右側が私の生まれた家なのですが、なんとまあ表の門のところに書かれた電話番号まで同じだったのです。びっくりし、そしてうれしくなりました。

家の裏には鴨川が流れています。東山がもう目の前に見えます。路地の前は木屋町通りで、高瀬川の瀬音が聞こえる。⁽⁴³⁾

テレビ番組の企画で三〇年ないし四〇年以上の歳月を経て訪れた森は、料理屋になつてなお変わらぬ生家を目の当たりにして歓喜している。

だが、《上木屋町》になじんだ池波正太郎の目には、変わりゆく京都の姿が映っていた。

十余年前の京都は、まだまだ、のどかなところが残つてい、宿の床から鴨川をながめていると、対岸を子供たちがタモ網を持って何やら魚を掬っていたり、川面にはしきりに燕が飛び交い、河原を低く低く飛んで来た燕が、床にすわっている私の頬をかすめて高く舞いあがりたりした。

いまは御池大橋が出来て、トラックや自動車の響音すさまじく、燕もめつたにあらわれぬ。⁽⁴⁴⁾

昭和三〇年代前半の池波は、強制疎開によって拡張された御池通りも北に位置する橋へ投宿していた。御池通の延長線上に橋が架かったのは昭和三九（一九六四）年のことだ。「ざわつかず、のんびりしている点が生命線」であった《上木屋町》も、時代の波にのまれつつあった。

駅前風景が、ここ十年ほどの間にまったく変わってしまったことには、私も馴れてきたようだが、今度、三条大橋に立ち鴨川の川をながめると、さすがにため息が出た。

川をさむ木屋町、川端の美しい瓦屋根のつらなりはそのままだが、その背後に、いくつもの高層ビルが建ち並びつつあって、鴨川兩岸の景観が見る見る変貌しかけている。⁽⁴⁵⁾

鴨川三条の橋上に立って北をみている。「かみ」ではなく「うえ」とも読めなくはないが、「木屋町」と「川端」というのだから、北に目をむけているはずだ。ため息が出るほどに「景観」は「変貌」していったのだろうか。

橋の立地した《上木屋町》の景観変容を考える際にポイントとなるのは、やはり御池通の拡張である。これによって《上木屋町》は、三条側と二条側とで完全に南北に分断された。漱石が祇園のお多佳さんと交情を結んだ際に宿した席貸「北大嘉」も取り払われて消滅している。そうであるがゆえに、漱石の句碑は御池大橋の西詰、御池通の南脇にある。

池波の滞在した昭和三五年の夏、この界隈におけるもつとも大きな変化は「おそめ会館」の開業である。⁽⁴⁶⁾ 彼が橋に泊まっていたのならば、いやがおうにも「おそめ会館」を目にしていたはずだ（図6）。

川端康成、白洲次郎、川口松太郎、大佛次郎など、そうそうたる面々が交友した《祇園》の元芸妓であるフライングマダムこと上羽秀（おそめ）の経営したクラブの巨大建築である。直木賞作家となる直前の池波正太郎の目に、当時としては大箱の「おそめ会館」はどのよう映っていたのだろうか。

御池大橋の殺風景の背後には、累々とつもる文学史上のエピソードが堆積している。



図6 おそめ会館（撮影年月日不明 筆者所蔵）

注

- (1) 杉田博明『祇園の女 文芸芸妓磯田多佳』新潮社、一九九二年。
- (2) 津田青楓『漱石と十弟子』芸艸堂、二〇一五年、二〇二、二〇四頁。
- (3) 白井喜之介『京都味覚散歩』白川書院、一九六二年、二六五頁。
- (4) 席貸ならびに引用文中に登場する「雇仲居（やとな）」や「新妍芸妓」に関する詳細は、次の文献を参照されたい。加藤政洋編『モダン京都〈遊楽〉の空間文化誌』ナカニシヤ出版、二〇一七年。
- (5) 松川二郎『全国花街めぐり』誠文堂、一九二九年、五〇四―五〇五頁。
- (6) 前掲、松川二郎『全国花街めぐり』五〇五頁。
- (7) 佐々政一編『夜の京阪（文藝界定期増刊 博覧会記念）』金港堂書籍株式会社、一九〇三年。
- (8) 大森痴雪『夜の高瀬川』（前掲、『夜の京阪』、六九―七八頁。引用は七〇頁より）。
- (9) 鈴木露村『京都の旅宿』（前掲、『夜の京阪』、一一―一八頁。引用は一一―一二頁）。
- (10) 前掲、鈴木露村『京都の旅宿』、一一頁。
- (11) 近代京都オーバレイマップを参照（<https://www.arc.risumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/>）。
- (12) 久保田米櫻『京都の料理店』（前掲、『夜の京阪』、一六一―一七四頁。引用は一七〇頁）。
- (13) 池波正太郎『食卓の情景』新潮文庫、一九八〇年。「祇園祭」一六八―一七七頁。引用は一六八頁より、初出は以下のとおり。「食卓の情景（連載第二九回）祇園祭その一」『週刊朝日』二七九九号（第七七卷第二九号）、一九七二年七月二日、六六―六七頁。「食卓の情景（連載第三〇回）祇園祭その二」『週刊朝日』二八〇〇号（第七七卷第三〇号）、一九七二年七月二八日、六六―六七頁。
- (14) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一六九頁。
- (15) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一七五頁。
- (16) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一七七頁。
- (17) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一六八頁。
- (18) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一七〇頁。
- (19) 前掲、白井喜之介『京都味覚散歩』、一〇六頁。なお、同店のウェブサイトには昭和三年の創業とある。たん熊北店ウェブサイト（<https://www.tankunakita.jp/#beginning-td>）¹、二〇二三年一月十八日最終閲覧。
- (20) 國分綾子『新訂版 京都味しるべ』駸々堂、一九八〇年、三六頁。

- (21) 住宅協会編『京都市全住宅案内図帳 最新版 中京区』住宅協会、一九五六年。
- (22) 嵐寛寿郎・竹中労『鞍馬天狗のおじさんは 聞書・嵐寛寿郎一代』七つ森書館、二〇一六年、二二頁。
- (23) 前掲、嵐寛寿郎・竹中労『鞍馬天狗のおじさんは 聞書・嵐寛寿郎一代』、二二頁。
- (24) 前掲、嵐寛寿郎・竹中労『鞍馬天狗のおじさんは 聞書・嵐寛寿郎一代』、二二頁。
- (25) 森光子『人生はロングラン 私の履歴書』日本経済新聞出版社、二〇〇九年、二九頁。
- (26) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一二頁。
- (27) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、九頁。
- (28) 『AERA』二〇〇四年一月一九日号(「朝日新聞クロスサーチ」で閲覧)。
- (29) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一二頁。
- (30) 西村善七郎編『大京都』大京都社、一九二八年、九七―九八頁。
- (31) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一四、二五頁。
- (32) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、二七、二二、一四頁。
- (33) 原澤久男編『京都商工人名録 昭和十五年版』京都商工人名録発行所、一九四〇年、七四頁。
- (34) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、四四頁。
- (35) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一七〇頁。
- (36) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一〇―一一頁。
- (37) 小島政二郎『天下一品 食いしん坊の記録』河出文庫、二〇一二年、八二頁。
- (38) 前掲、小島政二郎『天下一品 食いしん坊の記録』、八二―八三頁。
- (39) 北大路魯山人『春夏秋冬 料理天国』ちくま文庫、二〇一〇年、九七頁。
- (40) 虚子編『新歳時記 増訂版』三省堂、二〇一七年(初版一九三四年)、四二三頁。
- (41) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一三一頁。
- (42) 新三浦については、加藤政洋・河角直美『おいしい京都学 料理屋文化の歴史地理』(ミネルヴァ書房、二〇二二年)の第4章を参照されたい。
- (43) 前掲、森光子『人生はロングラン 私の履歴書』、一〇、一一頁。
- (44) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、一六九―一七〇頁。
- (45) 前掲、池波正太郎『食卓の情景』、五一頁。
- (46) 石井妙子『おそめ 伝説の銀座マダム』新潮文庫、二〇〇九年、二八四頁。

(本学文学部教授)